

かつてはこの時期だと一年でももっとも厳しい寒さに震えている時期、しかし、このところの地球規模の温暖化のせいかやたらと暖かい日がつく。と思っていたら、前々日からの猛烈な荒れ模様にも目的のコースもさぞジクジクだろうし、若干なりとも朝の冷え込みがきつければ路面凍結もありうると判断し、急きょ日当たりの良い「菊水山」に変更して実施。

六甲全山縦走路の前半最初の難関となる南面のきびしい登りではなく、今回は北面のゆるやかなコースからの登りに変更した。

幸い、一作日の荒天の影響もなく、すずらん台からのんびりとアスファルトの工事中道路を登ってゆく。このコースは、山頂に通信アンテナを建設するためにつけられたものだが、そのお役目を終えた今は格好の登山道としてバトンタッチされ、地元新興住宅地の多くの毎日登山愛好者のコースとして親しまれている。

毎日登山は神戸特有のもので、毎日登山発祥の地は“再度山大師道”と聞かすが、当時は高取山、一王山、摩耶山、布引、保久良神社の6コースが神戸の毎日登山コースとして親しまれていた。

これも六甲が神戸の市街地に近いこと、神戸に居住していた外人のレクリエーションに六甲山が盛んに登られ、見よう見まねではじめたことからつづいているようだ。中には何万回という達人もいるから驚きだ。

今は山頂に建つ高さ3～4mもある大きな石碑も、大きくなった樹木のために街からは見えなくなってしまったが、小学生の頃は良く見えた。当時、菊水山はほとんどが低木で、山頂付近は笹の湿地帯もあり、その頃はまだサギソウも自生していたらしい。その頃は草花には興味が無かったせいか覚えていない。今になって思えばまだまだ自然が身近に残っていたことに驚きやため息がついて出る。

ぼやいても仕方がない。魅惑の星の壊れ行くスピードを少しでも抑えられるようみんなで見守りを出し合おう。

このコースは前回2月の例会に予定していたコースであったが、悪天候の翌日で山道の氷結も考えられたので急きょ菊水山に変更したため、今回あらためて22回のハイキングコースとして設定し、北神戸の静かなコースをのんびり歩いた。神鉄沿線も六甲側はよく歩かれているのに比べ、北側の丹生山系は、まだまだ自然味の残るコースも多く、今回歩いた天下辻～屏風谷源流～黒甲越え周辺コースは、歴史的にも古く、昔は八多村から山田村へ、兵庫へと連なる往還として利用され、牛舎に米や木炭などを積んで運んだ面影が所々に偲ばれるコースとなっている。今回歩いたコースの脇にも炭焼き釜跡と思われるものが数ヶ所あり、昔の生活のにおいが残っているようなところであった。

今回は屏風谷の最源流を少し歩いたが、この谷の少し下流は深くえぐられたような溪谷の風格を持つ沢で、今なお手付かずの秘境の風情を残し、時には絶滅が危惧されている珍しい草花にも出合えるところといわれている。機会を見つけて川下からじっくりと沢づたいに遡行してみたいと思っている。

前半の雑木林に対し、後半の黒甲越え東尾根の道は、昼なお暗い杉林のコースで、針葉樹林の香りと、目には見えないが森林浴に良いとされる“フィトンチッド”の存在が感じられるコースであった。

ときには森に出かけ、小鳥のさえずりや、小川のせせらぎ、木の葉の緑に癒されながら、森の持つ力を大いに活用したいものである。

西日本の 6 月は梅雨を迎えて毎日が重たい雲に日差しがさえぎられる季節である。年中真夏のなかを過ごしている国のことを思うと、四季の区別があることに感謝したり安堵したりしながらも、やはり梅雨はうとうしい。そんな中でこの時期元気なものに“カタツムリ”と“アジサイ”がある。我が家で飼っている 4 匹のカタツムリたちも、このところにわかに動きも活発になってきた。夜など静かにしているときには、バリバリとレタスを食べる音を発しながら、自分たちの存在を誇示しているからおもしろい。

森林植物園にアジサイを訪ねよう……。そんな気持ちで計画した今年の「梅雨時期ハイキング」だったが、メリハリの弱かった入梅の影響か、アジサイも開花時期を迷ってしまった。指揮官となるアジサイの号令も弱々しく開花もばらばら。中でも期待の「シチダンカ」あたりは「お先に咲くよ……」とお客の期待も考えてはくれずさっさと盛りを済ませてしまっていたのか影がうすい。「え～い 勝手に咲け～」と指揮官の投げやりに、白いアジサイ、青いアジサイ、ピンクのアジサイたちも足並みが揃わない。

「今年はだめだわ……」と切り上げ、山田道から弓削牧場へ。古くから市民に親しまれてきたコースのひとつ「山田道」。ここよく歩きやすい森林浴の小路だった。

弓削牧場には初めての立ち寄り。入り口まで迫ってきた振興住宅に、「あれ？」と一瞬コースを疑う感覚に。

都会から《真近の牧場》をキャッチフレーズにしてきたとはいえ、この現象は牧場にとっても「想定外」だったに違いない。

「裏庭に牧場がある住宅地」といえばカッコイイが、風向きによってはなまなましい？ 牧場の香りも満喫できるだろうな……などお節介な想像をしながら、牛乳ならぬ冷たく黄色い泡立ちミルクを飲ませてもらった。満足。

8 月の猛暑に予定していた第 24 回こまくさハイキングが、急きょ取り消しとなりましたが、ほっとされた方もおられたかもしれませんね。

一旦延ばすとなかなか再設定の日程が決めにいく、結局「1 回休み」となりました。

10 月の例会にあらためて組みなおしたコースは、六甲ケーブルを使い、サンセットドライブウェイから記念碑台を經由し、ノースロードからシュラインロードを下るコースを設定しました。このコースも六甲に多くある横文字表示のコースで、“シュライン”とは“神社”の意味を持っており、その名のとおりコースの脇には多くの石仏を祭った小さな祠が祀ってありました。

コース途中に行者堂が残っていることや、登り口に石の鳥居が建っていたことなどから、昔、麓の人たちの行者道として拓かれたものと思われます。石仏の小さな社は 33 箇所あるそうです。

旧居留地に住み、六甲登山を開拓した外国の人たちがこのコースをシュラインロードと名づけたものだと思います。

六甲の中でも比較的静かなコースで、適度な道幅と少ない起伏、あまり人に会うことも無く降りることができました。

秋の刈り入れも済み、道端に咲くコスモスと、朱色に色づいた柿の実が目をはくのどかな唐櫃の集落の中を進み、神鉄有馬口に着きましたが如何だったでしょうか。

第 25 回 六甲・摩耶山上コースを歩く 2007-12-20

今年も押し迫った 12 月 20 日、冬の六甲山上コースを歩いてみた。年末の有馬のそわそわした感じの温泉街を通り抜け、有馬ロープウェイを使い快適に山上駅に着く。茶褐色の色に衣替えした道端の草木もすっかり冬のたたずまい。

六甲山カントリークラブのゴルフ場を貫通するようにつけられた縦走路を西に進む。通常、六甲縦走は西から東に進むこととなっているが、今回はその一部を東から西に歩いてみた。逆走はときどき景色の記憶を狂わせる。「あれ？」と思うところもあったりして、また変わったコースの見所を味わった山上歩きとなった。

早々と記念碑台公園に着き昼食。

ここからは、第 11 回こまき例会で歩いた「ノースロード」に入る。このコースはその名のとおり、北斜面につけられた静かなコースであるが、北斜面だけあって日陰となり冬は寒いコースである。その分、雪が降れば南面にはない積雪の楽しみも味あわせてくれる一面も持っており、アイゼンを付けての楽しい雪道歩きができるコースでもある。ノースロード途中からドライブウェイに戻り、しばらくその道を歩く。T 字が辻を過ぎやがてサウスロードの山道に入ると今度はその名のとおり南面の明るい日差しがそそぐ水平道を歩くことになる。

摩耶山上湖の穂高湖に立ち寄り小休憩。いつも静かなこの池にはときおり美しい姿の「カワセミ」も飛来してくるところ。昔は湖面もしっかり凍ったものだが最近はそんなこともほとんど無い。

摩耶山につづくドライブウェイを歩き、摩耶山上掬星台に到着。摩耶ロープウェイ・ケーブルを乗り継いで下山。お疲れさんでした。

第 26 回 妙法寺～塩屋 2008-02-18

今年の冬は久し振りに六甲山でもよく雪が積もりました。このため第 26 回のこまき例会も当初は再度山周辺のコースを設定していたけれど、残雪は六甲山山頂付近はまだかなりの雪が残っているだけでなく、低い再度山周辺の日陰コースも部分的に凍っていることが判明。急きょコースを妙法寺から横尾山山麓～高倉～おらが山～鉄拐山～旗振山～塩屋に変更し、ご案内することになりました。

途中、横尾山山麓から眺める北神戸の眺望は、すっかり開発が完了し、ぎっしり詰まる住宅エリアの広がりには驚きや感心した風景でもありました。神戸市は“みなと神戸”の表玄関である須磨・再度・摩耶・六甲山南面の景観を保存した分、裏六甲の開発が進んだということでしょうか。

今住んでいる我が北須磨団地も、開発から今年で 40 周年を迎えました。

かつては太山寺まで細い山道つたいに行き来できる山並みでしたが、そのころは、回り全てがそのようなもので、当時では今の光景はとても想像できない変わりようです。

せめて今回歩いた須磨の山並みくらいは、今後も残してもらいたいものです。

“一の谷逆落とし”の歴史的な場所は、このあたりか、長田のひよどり越えあたりかの判断が分かっているとはいえ、江戸中期元禄時代から大阪堂島の米相場を、旗振山を中継点に加古川、岡山に大きな旗を振って知らせていたという歴史をうかがわせる山々でもあり、親しみと愛着をもってこれからも歩いてゆきたい山のコースでもありました。

今回の写真集は後に少しスペースが残りだったので、古くから伝わるとされるいくつかの伝説の中から、須磨・長田にまつわるものをひとつ引用してみました。今の身近な地名や地域に、のどかだったであろう昔の面影を重ね、想像しながら観賞してみてください。

梅雨時期の例会はやはり天候が気になる。今回もやきもきしたがなんとか午前中はもつかもと決行。神鉄北すずらん台駅から無料の送迎バスが利用できるのはありがたい。数日前から森林植物園恒例の“あじさいまつり”も始まっている関係からか、ウィークデーにも関わらずバス待合の列は長く、「乗れるか？」と人数を数えてみると 40 人弱で大丈夫そう。

15 分も乗るか乗らないくらいで植物園の入り口に到着。今回のコース予定はここから再度山ドライブウェイを 30 分ほど歩いて南下し、洞川湖から梅林、修法が原経由大師道を下り、県庁前までのコースで案内していたが、天候の関係でこの園内を歩くコースに変更、早めの引き上げとした。

あじさい祭りに因んでコース内にはいくつかのクイズもあって、適当に遊びながら小雨がぱらつく中をあじさい園からスタート。開花の様子はちょっと早く、見ごろの壮観さには欠けるが、それでも種類によっては大きく咲き、青い種類のもので楽しませてくれた。お目当ての“シチダンカ”も期待に込めてしっかり咲いて待っていてくれた……のかな？

その後、天津の広場、ブリスペン広場を通り、香りの道を回るコースに入る頃には雨も殆ど気にならない程度になる。長谷池からスタート地点の管理棟に戻って弁当タイム。午後からは 2 階の企画展示『絶滅危惧種の植物たち』の写真とパネル展示を観賞。北鈴駅までの送迎バスのお世話になって帰路に着く。

回を重ねてきたこの例会も、傘をさしてのウォーキングはめずらしい。まあたまにはこんな歩きも記憶に残ることだろう。お疲れさんでした。

ダムサイトに立ってみると結構迫力があつた。満水状態ではなかったものの、青緑色の水を満々と貯めた“白い水がめ”は堂々としていた。

このダム計画の話もずいぶん古い。記憶にある昭和 42 年の集中豪雨で大きな被害が出たことが契機になり計画が進んだらしい。

そのころはよくこのあたりの岩場でロッククライミングのトレーニングをやっていた頃で、今回眺めた「妙号岩」もよく登った。当時はこの妙号岩も川底からかなり登ってきたところに位置していたが、対岸に設置された「ダムの想定水面」の目印に「この岩場も湖面に沈んでしまうのかなあ」と案じたものだった。

ダムサイトからの階段を下りるときは「やっぱり土木工事はスケールがでっかいなあ」と感心しながらの下降となった。降り立って見上げる“白い壁”からはなにか自信ありげな風貌すら漂っていた。「頼むよ 台風時はしっかり受け止めてや……」

下流に取り残された“烏原ダム”。かつては飲料・治水にと頼りにされていたのだろうが、今はその重厚な石積み姿もすっかり老体化し、引退の話も出始めるのか？「いや いや昔取った杵づか まだまだよ！」と“老体”ならぬ“堅牢体”ぶりを発揮し、“後期高齢まだまだ健在なり！”とその存在感を示してもらいたいものだ。

まあ お互い無理せず 目立たず世間様の邪魔にならぬよう、ゆんるりとお役にたつことをしていきましょうや。こうやって元気に過ごすのもお役に立っていると思いつつ……。

通常須磨の山歩きは塩屋か須磨浦公園から妙法寺を東西に縦走して歩くのが一般であるが、今回はその須磨背山を北から南に越してみた。

とは言え、妙法寺からではなく山陽電鉄須磨駅に集合したのちバスで高倉団地手前の子供病院前で下車。須磨アルプス取り付け点の 400 階段は登らずそのまま進み、横尾山の北山麓を東へ回ってこの地域の人たちの“毎日ウォーキングコース”に行く。ここからの眺望は北に広がる開発住宅団地の群れに圧倒される。

「あれが菊水山だから、あそこがひよどり台で、あの赤い屋根がしあわせの村になるなあ」

変わり行く裏神戸の街並みをしばし観察したのち須磨アルプス東端取り付け点に着く。ここから U ターン気味に約 100 段の階段を登り東山手前の稜線に出る。西端の 400 階段に比べればこちらの階段はずいぶん楽だ。

稜線にでるや今回はすぐに南に伸びる板宿へ下る八幡尾根？に入る。この道はいつも誰かが竹ぼうきで掃き清めているような跡があり、気持ちよく歩かせていただく。比較的野鳥の多いコースで、特に冬場は葉が落ちるため、さえずりと共に姿もよく見かける。この次は双眼鏡持参で歩いてみよう。ゴールの八幡神社は板宿の街並みが一望できる高台にある。

眠っていた山々の斜面に木々の新芽が広がり、すこしずつ活気を取り戻してきたのか、野鳥たちのさえずりと合わせて本格的な春の到来を告げて迎えてくれた摩耶の山道。とはいえ、山はまだ早春の感が残り、降り立ったロープウェイ山上駅ではひんやりとした風が身を引きませる。

歩きなれた山上路を穂高湖に進み、今回は湖には立寄らずにそのままシェール道に向う。ところどころで色濃く残るミツバコバノツツジの花に目をやりながら、やがてせせらぎの流れるシェール道。

おそらく冬眠から覚めた小魚たちも、流れてくるえさを待ってせっせと動き回っているのだろうが、カワセミなど小鳥の目とちがい、我々人間どもにはその姿はなかなか目視できない。

徳川道から森林植物園に入る。ここではあじさいはまだ早かったがちょうどシャクナゲが満開で、いろいろな種類のシャクナゲを觀賞することができた。

2003 年 10 月 15 日に第 1 回目を始めたこまくさハイキングも今回で 30 回。コースには若干の重なりもあるものの、基本的には独立した 30 コースを歩きました。少し市外に足を向けば程よいコースもあるけれど、段々とマイカー移動もリスクが伴うのでままならず、まあこれからは振り出しに戻ってのコース選択もあるでしょう。それはそれでまた気楽に歩きましょう。

第 31 回 須磨背山**2009-06-18**

今回は梅雨入りを前にして好天の一日を須磨の山で楽しんだ。起点となる山陽塩屋駅前に集合した“こまくさ仲間”15 名のおじさんおばさんたち。今回登ったコースは、第 26 回のときに下ったコースとは別の、少し南の山道を選んだ。

塩屋の街中を少し東に歩き、すぐに急な登りに取り付く。一步ずつゆっくり登ってゆくと、いつもながら最初の 1 ピッチはしんどいものだ。

やがて、第 26 回のときに下ったコースとの合流点に着き休憩。このあたりは大きなヤマモモの木が何本もあり、夏には落ちた実が道をとところどころ赤く染めるほどになる。

登り終わると山上遊園地に出る。かつてここにはドーム上の「須磨浦山上噴水ランド」があったところで、料金を払って館内に入ると 200 ほどの客席の前が舞台となっており、軽快な音楽に合わせて色鮮やかな噴水がそのメロディのリズムに合わせて強弱・方向を自在に操り噴出していた光景を思い出す。今は普通の噴水の他にちょっとした科学の遊び道具が設置されている遊園地になっていた。

旗振山から鉢伏山を経て、水平森林浴道を東へ進み、妙見堂跡から高倉町～須磨寺へ下り、須磨寺～天神さんの間の“智慧の道”と呼ばれる商店街で昼食し解散。

第 32 回 布引ハーブ園周辺～布引の滝**2009-10-29**

神戸には多くの観光スポットがあるが、今回はそのひとつで北野界限と並んで人気のある布引ハーブ園を散策したのち、市が原から布引谷を下るコースを歩いた。

料理に興味のある人にはハーブ園で栽培・展示されている植物類は関心が湧くのだろうが、そうでない者にはイマイチこの園の値打ちがわからない。それでもいろいろな草花につけられた名札を確認しながら散策する。

中間駅地点までゆっくりくだり、中間出口から退園し市が原に向う。

幼稚園のグループが川原で賑やかにしゃいでいるそばで弁当休憩。

午後からは布引谷を下る。五本松堰堤の正式名を持つ貯水池でしばし休憩。この貯水池は堰堤の耐震補強工事を行うにあたり、ダムを空にし、湖底の堆積土砂をダンプカーでしゅんせつ。神戸空港の埋め立て地へ運ばれた。さらに布引谷に残る上水道の歴史施設跡の昔の水道事業に思いを馳せながら下り、途中布引の雄滝～雌滝などを観賞しながら新神戸駅に着く。

第 33 回 妙法寺～横尾山麓～須磨背山～須磨浦公園**2009-12-17**

須磨の山にもいろいろなコースがとれる。荒々しい須磨アルプスの稜線をたどる縦走路、南面の森林浴山腹道、北面の水平散策路。その中で今回は妙法寺から西へ横尾山北面の散策路を経て、高倉団地からおらが山・鉄拐山～旗振山～鉢伏山からすまうら公園へのポピュラーなルートを歩いた。

12 月にしてはめずらしく気温が低く、この冬は寒い冬の訪れのような。

みんなしっかり防寒衣をまといゆるやかな登り道を進む。横尾山麓から眺める北方面の住居開発はめざましく、高層住居ビルと間をくねくね走る高速道の様子は、都会中心地域と周辺地域の境目が外へ外へとどんどん広がっていく感じだ。

明石海峡大橋を臨むあたりから高倉団地に入り、おらが山のふもとを階段直登を避けて斜めに進む。

稜線に出るとやはり風があり、少し気温も下がってきた。鉄拐山～旗振山を経て鉢伏山で昼食。幸い展望台室内休憩室が開いており助かった。

ここからは、目の前に広がる須磨浦の海岸を下に眺め、急な石段つづきの道を下り、山陽電鉄須磨浦公園駅前で解散。

おしまい